

近年審美的な要求が増し、術者に求められる技量、要望もとどまる様子がない。開業医にとって審美的な新材料の情報は重要であり、各医院の努力が求められるところである。こうした新材料の導入に相まって、当然それを扱う新技術の導入も必要となっている。しかしオール・セラミック、ラミネートベニアを導入したからといって、必ずしも患者に新材料、新技術の恩恵が享受できるとは限らないと演者は考えている。つまり患者にとっての新材料、新技術への期待に応えられるのは審美性のみならず、長期的な予後の安定をも達成すべきと、考えるからである。さて新材料が長期的な安定を保證するかというと、答えは必ずしも「イエス」ではない。保證するためには、やはり今までの経験や、科学に裏打ちされたエビデンスが必要となってくる。新材料の導入に先立ち、補綴物を長期に安定させるには、歯周組織の本当の姿を先人たちの経験、研究をもとに、さらに検証する必要があると考えている。換言するならば補綴物の受け入れる歯周組織に関する考察が不足したままならば、どんな材料を用いても、口腔の長期的な健康には寄与できないからである。

演者は審美材料としていまだに、**pfm** クラウン (=メタルボンド) を中心として臨床を行っており、一昔前の修復法とも考えられるが、これに取って代わる修復材料も見当たらないと考えている。そこでメタルボンドの問題点を考察し、さらに歯周組織の評価について一緒に考えたい。そして、ほとんどの一般開業医が既に導入している、メタルボンドでの審美補綴について予後も考慮し、検証したいと思う。